

川崎大師教学研究所 活動報告

平成30年1月1日～12月31日

1. 講演会

◆平成30年度 川崎大師仏教文化講座

「真言宗とその周辺」(全6回) 午後2時～3時30分・日曜日開催

・第1回：4月15日

「弘法大師と世界の宗教・思想」

廣澤隆之教授

・第2回：5月6日

「弘法大師のしんじつぎ真実義」

福田亮成所長

・第3回：6月3日

「空海は我が宗を、なぜ真言宗と名づけたのか」

小峰彌彦教授

・第4回：9月30日

「真言宗とその世界観」

北尾隆心教授

・第5回：10月14日

「弘法大師の文章について」

佐藤隆一教授

・第6回：11月18日

「密教とシヴァ教」

種村隆元教授

◆第19回 公開講演会

11月25日(日)午後2時～3時30分

「大師、四十歳の心境を詠ず 一弘法大師の『中寿感興の詩』一」

大正大学仏教学部教授、真言宗豊山派南蔵院住職 野口圭也先生

2. 研究会

- ◆川崎大師教学研究所「聖教類研究会」(『釈論打集類聚』の研究)

第14回：2月20日(火)

第15回：4月6日(金)

第16回：7月6日(金)

第17回：8月30日(木)

- ◆川崎大師教学研究所「『羯磨文談義』研究会」

第3回：7月7日(土)

3. 会 議

- ◆「教授会」・「川崎大師教学研究所会議」

第2回：6月23日(土)

第3回：12月17日(月)

※第1回は持回り

- ◆『川崎大師教学研究所紀要』編集会議

第1回：4月12日(木)

第2回：12月17日(月)

4. 出 版

- ◆『お大師さまとともに』第46集

1月1日発行

- ◆『川崎大師教学研究所紀要』第3号

3月21日発行

「聖教類研究会」活動報告

文責 駒井信勝

「聖教類研究会」は、川崎大師教学研究所が所蔵している聖教の整理、並びにその研究を行なっている。

発足当初は、川崎大師教学研究所の福田亮成所長（当時）と、若手研究員の共同研究を行う場を設けることが目的であった。そして、研究テーマを選定していく過程で、真言宗にとって重要なテキストであること、川崎大師教学研究所独自の研究であること、この二点が重視された。

一つ目の条件は『釈摩訶衍論』を読むことで同意された。二つ目の条件を満たすこととして、川崎大師教学研究所が所蔵している文献をメインテキストとして使用することが決定した。

そこで、川崎大師教学研究所が所蔵している聖教の中から、『釈摩訶衍論』と関連のある文献を精査する運びとなった。このようにして、聖教の整理、並びにその研究を行うようになったのである。

現在は江戸期の高野山の学僧である、依順房義剛（？～1715）撰『釈論打集類聚』の翻刻・書き下し・和訳を行っている。研究会は一月に一～二度開催され、参加者が担当箇所を輪読している。

研究会のメンバーは以下の通り。

- ・川崎大師教学研究所前所長 福田亮成（研究会代表）
- ・川崎大師教学研究所研究員 駒井信勝
- ・川崎大師教学研究所研究員 別所弘淳
- ・川崎大師平間寺教学課課員 佐竹隆信
- ・智山伝法院常勤研究員 鈴木晋雄

以上

『羯磨文談義』研究会」活動報告

文責 池田友美

本研究会は、『羯磨文談義』の研究を目的として発足した。『羯磨文談義』は中世律宗に関する資料であり、授戒作法の一部としての「羯磨」に関する講義の聞書である。

研究会のメンバーは以下の通り。

- ・川崎大師教学研究研究所研究員・大正大学非常勤講師 別所弘淳 (研究会代表)
- ・大正大学名誉教授 苫米地誠一
- ・龍谷大学特任専任講師 大谷由香
- ・川崎大師教学課課員 佐竹隆信
- ・大正大学大学院博士後期課程満期退学 池田友美

現在『羯磨文談義』は、大正大学図書館所蔵本（旧平等心王院所蔵本）、西大寺所蔵本、川崎大師教学研究研究所所蔵本（旧新大仏寺所蔵本）の三本の写本が確認されている。本研究会では以上のうち成立が最も古いと考えられる大正大学所蔵本を底本とし、他の二本を対校本として、校異を取りながら翻刻作業を進めている。

それぞれの写本を旧蔵していた槇尾山西明寺平等心王院、西大寺、伊州新大仏寺が、いずれも中世に真言系の律宗がさかえた寺院である点も注目される。

現在の進捗としては、本紙三十七丁のうち、二十丁右までの翻刻が概ね済んでいる。翻刻が完了し次第、内容の検討に移行していく。

本書冒頭には「今羯磨文弥勒菩薩非別所別会説也瑜伽論之中玄奘訳出給戒本同事」とあり、この講義の対象となった「羯磨文」は玄奘訳『菩薩戒羯磨文』(T.24,No.1499)であることが推測される。この「羯磨文」のほか、玄奘訳『菩薩戒本』(T.24,No.1501)が存在し、いずれも弥勒菩薩説、玄奘訳とされ、題号以下に「出

瑜伽論本地分中菩薩地」とあることが確認できる。以上のことから本文の序盤には、玄奘渡天の話を皮切りに『瑜伽師地論』の構成、「菩薩」の語義の解説、『菩薩戒羯磨文』の構成や題号の意義、『菩薩戒羯磨文』『菩薩戒本』それぞれの訳出年代、さらに別訳である曇無讖訳『菩薩戒本』(T.24,No.1500)との関係性、菩薩戒の得戒と種姓・発心の有無について、地獄における菩薩戒の得戒など、講義において述べられた事柄が録されている。

『菩薩戒羯磨文』には「受戒羯磨」「懺罪羯磨」「得捨差別」の三門があり、十四丁以降この「受戒羯磨第一」に関する内容に入っていく。また、三十三丁以降には「懺罪羯磨第二」「得捨差別第三」に関する内容が講じられているようである。

第一回「川崎大師教学研究所 研修旅行」

文責 別所弘淳
佐竹隆信

平成三十年十一月二十七日、川崎大師教学研究所では、第一回「川崎大師教学研究所 研修旅行」を開催した。当山貫首をはじめ、川崎大師教学研究所・廣澤隆之教授、別所弘淳研究員、同研究所幹事・筒井隆成教学課課長、相沢善幸教学課主任、佐竹隆信教学課課員の六名が参加し、時宗総本山遊行寺（藤沢市）の年中行事「歳末別時念仏会」に参拝した。

遊行寺は、一遍上人を宗祖とする時宗の総本山で、歌川広重の『東海道五十三次』にも描かれる神奈川屈指の名利である。また、隣道の「遊行寺坂」は箱根駅伝のコースであり、この区間を疾走する選手達にとっての難所としても知られている。

この遊行寺には、戦火などの被害により幾度となく堂宇を焼失した歴史があるが、その都度再建されている。特に現存の木造本堂（国の登録有形文化財）を有する伽藍は東海道随一と謳われ、樹齢七百年と推定される大銀杏と共に、荘厳な雰囲気醸し出している。

今回参拝した「歳末別時念仏会」は、かつては年末に行われていたが、昭和五年（一九三〇）頃より、十一月に行われるようになったとされる。また「別時念仏」とは、祖師の命日や彼岸などに当たって、一定の期間を定めて念仏三昧に専念する修行のことである。この歳末別時念仏会は、遊行寺の三大打事の一つとされ、「報土入り」（詰時）と「御滅灯」（一ツ火）の二部で構成されている。

この別時念仏会の初出資料とされているのが、『一遍聖絵』巻四である。ここには、

其の年（弘安二年）信濃国佐久郡伴野の市庭の在家にして歳末の別時のとき、紫雲はじめてたち侍りけり。（『時宗宗典』巻下・一三五七頁下）

と、弘安二年（一二七九）に、一遍上人が歳末別時念仏会を行っ

たことが記されている。

また、『一遍上人縁起絵』巻五に説かれる、第二祖、他阿真教（一二三七～一三一九）の事績には、

凡そ毎年歳末七日夜の間はあかつきごとに水をあみ一食定齋にて在家出家をいはず常坐合掌して一向称名の行間断なく番帳を定めて時香一二寸を過ぎず。面々に臨終の儀式を表せられけるは月日空しくうつりきて露の命もきゆることはりの至極する所を行じあらはされけるなるべし。（『時宗宗典』巻下・一四〇〇頁上）

と説かれ、他阿真教の代には、歳末に七日七夜の別時念仏会が行われていたことが分かる。さらにこの法会が、臨終を表現する儀式であることも説かれている。

この法会で行われる「報土入り」とは、浄土往生への実践行の儀礼的表現である。まず修行者は報土（極楽）である白道に入り、遊行上人の前で念仏三昧に入る。そこで、阿弥陀如来の境地を体現した上人より十念を授かり浄土往生し、衆生救済のために、再び穢土へ立ち帰るまでの儀礼である。

続いて行われる「御滅灯」では、本堂内の火が順次消されてゆき、最後に大光灯と後灯が消され、堂内が暗闇と静寂に包まれる。これが臨終の表現であり、『真宗要法記』「別時中夜滅灯事」に、暗中に高声念仏一唱す。具には別紙に記すなり。『法花』に云く、我れ今、中夜に於いて当に涅槃に入るべし。乃^上至仏この夜滅度したまふ。薪尽きて火の滅するが如しといへり。是くの如き義を表はす。（『時宗宗典』巻下・九九一頁下）

と説かれていることと符合するのである。

暗闇の堂内に法主の念仏が聞こえてくると、火打石で再び火が灯され、光明に照らされた阿弥陀と釈迦の世界が戻ってくることを表現している。これを長澤昌幸氏は、「擬死再生」を意味した儀礼であると述べている。（長澤昌幸「臨終の儀式と遊行寺歳末別時念仏会」、『一遍仏教と時宗教団』所収・法蔵館、二〇一七）

また、この法要で注目されるのが、歴代遊行上人の名号を掛ける鳥居形存在である。近世に編纂された『時宗要義問辨』には、

昔、吾が祖、隅州巡化の時、正八幡の花表の前に寓して、別時^{トリキ}を修す。則ち名號を花表に掛け、其の基に大光柱を立て、大光を然燈す。(『時宗宗典』卷下・一二二七頁上)

と、一遍上人が大隅八幡宮を詣でた際に、「南無阿弥陀仏」の名号が書かれたものを鳥居に掛けて別時念仏会を行ったことが説かれている。すなわち、現在の法要のしつらえが、一遍上人の事績に習っていることを示しているのである。

今回参拝した際、この鳥居形以外にも、白い幣束を結界として用いるなど、数々の神仏習合の形態を見ることができた。『一遍聖絵』第四には、

大隅正八幡宮にまうで給(ひ)けるに 御神のしめし給(ひ)ける哥

とことには南無阿弥陀仏となふれば

なもあみだぶにむまれこそすれ(『時宗宗典』卷下・一三五六頁下)

と、一遍上人が大隅正八幡において神詠を授かったことが説かれているように、時宗は神道との習合が随所に見られる。

今回参拝した歳末別時念仏会は、この神仏習合の姿が、現在に至るまで脈々と継承されていることを実感できる貴重な法要であるといえよう。今後も、このような研修を実施していきたい。

最後に、研修旅行を実施するにあたり、種々ご尽力くださいました遊行寺職員の皆様に厚く御礼申し上げます。